九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「タ」のメンタル・スペース理論的解釈

曺, 美庚
広島修道大学人間環境学部 : 講師 : 日韓対照言語学、異文化コミュニケーション論

https://hdl.handle.net/2324/6051

出版情報：人間環境学研究. 1 (1-2), pp.63-79, 2003-02. 広島修道大学人間環境学会
バージョン：
権利関係：

「タ」のメンタル・スペース理論的解釈

曺　　美庚

人間環境学研究　第1巻　第1・2号合併号（2003年2月）別刷
広島修道大学人間環境学会

「タ」のメンタル・スペース理論的解釈

曺　　美庚

（受付　2002年10月10日）

I. はじめに

過去・完了形式としての「タ」形式については，これまで膨大な研究が行われてきている。それらの研究には，テンス・アスペクト・ムードなどに関する一般的な文法範疇のものや，話者の心的状態の反映による多義的なものなど，多種多様なものが含まれる。そして，テンス・アスペクトで説明しきれない部分をムードで説明したり，多義的なものとして扱ったりしてきた。こうした先行研究を踏まえつつ，本稿では，言語表示は話者の心的表示の表れであるとするメンタル・スペース理論の導入を試みる。メンタル・スペース的なアプローチをとることで，「タ」形式は，話者の視点と認識による「心的表示としてのタ」として捉えられ，「話者の認識マーカー」として統一的に解釈できる。それではまず，「タ」研究の歴史から概観して見よう。

II. 「タ」研究の歴史

従来の国文法においては，「タ」に関する記述は「ル」との対立関係として述べられている。ル形は動詞などの「活用語尾」，タ形は動詞などの活用形に「助動詞タ」が付いたものとして，‘現在’に対する‘過去’，あるいは‘未完了’に対する‘完了’を表すものとして述べられるのが一般的であった。

このような従来の研究を踏まえ，寺村［1971］は「タ」の意味について次のような類型化を提示している。

A.　一義的に規定しようとするもの

(1)　‘過去’を表すとみる（テンス説）

(2)　‘完了’を表すとみる（アスペクト説）

(3)　話し手の判断のしかた，立場の表現とみる（ムード説）

B.　多義的に規定するもの

以下では，「タ」に関する膨大な研究を網羅的に体系づけた寺村［1971］に基づき，これまでの「タ」研究を概観することにする。

1. テンス説について

テンスという文法範疇は，ある時の一点（基本的には発話時）を基準として，描こうとする事象がその時のことであるか，それより前か，あるいは，それより後かによって，言語形式（動詞の形態）が一定の規則性を持って変化するとき，その言語はテンスを持つといい，その文法形式をテンスという（日本語教育辞典［1982］，寺村執筆）。

このように，ルとタの対立を‘時’に求めるテンス説には，鈴木重幸，金田一春彦，鈴木英夫などの研究が含まれる。この中でも，金田一春彦は‘現在・過去’というのを修正して‘非以前・以前’という観点での特徴付けを提唱した。鈴木英夫［1970］は，さらに‘認定’という概念を補足し，タは「状態の存続や動作・作用の生起・終結についての認定を，基準となる時点の以前になしたということを示す」ものだとした。

本稿では，この鈴木英夫の‘認定’という概念に注目し，‘認定’はすなわち話者の事態の流れや終結に対する認識であると解釈し，「話者認識」と名づける。

2. アスペクト説について

テンスという文法範疇が基準時に対する事象の前後関係を問題にするのに対して，アスペクトという文法範疇では，時の前後関係というよりも動作・作用の‘ありよう’が問題になっており，ルとタの対立を‘未完了’か‘完了’かの対立とみるのである。これは，文語で完了の一つを表した‘タリ’が‘タ’となって残ったとする歴史的考察に由来するものである。

このアスペクト説は，松下［1930］に始まるといってよいが，松下大三郎は，タは「現在，過去，未来，不拘時の何れにも用いられてその完了を表す」とし，タがいろいろの‘時’に用いられるのは，判断主体たる「我」をどこに置いて考えるかによるのだと説いた。たとえば，

(1)　明日伺ったらばお目に掛かれませうか。（松下［1930］）

となるのは，「我」を明日という‘未来’において，その時に「伺う」という動作が完了したものと考えるからだという。

(2)　借りたものは返さなければならない。（松下［1930］）

といった表現も，このように考えてこそ自然に理解できると説明した。ここで注目すべきことは，完了を認定するものとしての「我」という概念を重要な要素としていることである。以下の例文も同様である。

(3)　花の咲いたときに又来よう。

(4)　明日勝った組の写真をとらう。（三上［1953］）

3. ムード説について

山田［1908］の『日本文法論』では，ある言語形式を‘時’という文法範疇で特徴づけ，分類することが果たして妥当であるか，という根本的な疑問が投げかけられ，普遍文法が志向されている。

そこでは，「時の根本概念」の把握において，その現在・過去・未来という区別が，実在界に存在する区別ではなく，あくまでも「吾人の主観と時間経過との関係によりて生じたるもの」で，観察者の立脚地と切り離してはあり得ないのだという点を認識させる。

さらに‘現在’を表すとされている用法も，正しくは「思想の直接表象」，すなわち「回想もせず，意識其の者直接の活動によりてあらはされたる思想」と把握すべきだとする。‘過去’についてもその形が表すものは決して客観的な事実ではなく，正しくは意識の「回想作用」というべきものであると断じた。そして回想作用をなし得るのは過去界の事実に限るけれども，その逆は必ずしも真ではなく，客観的には過去の事柄でも，回想としてではなく直接表象として表すこともあることを実例によって示した。「未来形」については主観的意識の「予期設想」を表すものであると規定し，以下のように提言する。

> 「吾人は思想の根源よりして文法上の説明よりして又国語の状態よりして所為文法上の時を否定せり。そして，之に加ふるに思想の状態の区別を以てせり。かくのなれば，一方に於いて「法」と称するものの領内に入らむとせり。」

時枝誠記も「過去及び完了と云へば，客観的な事柄の状態の表現のやうに受け取られるが，この助動詞の本質は話し手の立場の表現である」とし，山田説に共感を示している。

4. 多義的に規定するもの

タの意味・機能には，二つあるいはそれ以上のものがあることを認める立場もある。どのような述語詞のタ形が，どのような環境において，いかなる機能を担うのかについての考察の中で，三上［1953］は次のようにルとタを分類している。

1) 事実としての完了と未了
2) 心理的完了と未了
3) 期待の有無
4) 想起の主張
5) 礼儀的な問いとただの問い

三上［1953］はまた，その動詞の種類（パーフェクティブとインパーフェクティブ），文の種類との関連についても指摘し，過去形で終わるのはパーフェクティブな述語が多いとしている。また，2）の心理的完了と未了の例として，

(5) a コノ椅子ハ先刻カラココニアッタ。

b　コノ椅子ハ先刻カラココニアル。

をあげ，「客観的事実としてはほとんど違わないが，a. それを経験として報告するか（間接的），b. 知覚として表出するか（直接的）の主観的相違によるテンス選択である」とし，「a は［先刻カラ］に重点があり，b はそこに重点がない」と説明している。

同様に，寺村［1971］の多義的タの考察においては，それは「ある事柄を単に過去の事実として述べるのではなく，過去のことを仮想して推量したり，価値判断をしたりするようなより複雑な話し手の心的状態の反映」だと述べられ，以下のような分類がなされている。

1）過去に実際に起こらなかったことを，起こり得たことと主張する
2）過去に実際しなかったことを，すべきであったと主張・回想する
3）忘れていた過去の認識を思い出す
4）未然のことを，すでに実現したことのように仮想して言いなす
5）差し迫った要求を，すでに実現したことのように言いなして表す[1)]

1）日本語の「タ」の特殊な使い方として，相手に向かって，命令あるいは先取り要求をする以下のような用法がある。

（22）待った！
（23）どいた，どいた！
（24）さあ，買った，買った！

これは，ぞんざいな感じを伴う差し迫った要求として説明されることが多い。
そのため，以下のような文は成り立たない。

（25）?? もう一年待った！
（26）?? ゆっくり買った，買った！

寺村［1971］によれば，こうした表現は，「緊迫した状況で，相手を自分の要求する行為に誘い込むために，その動作をすでに実現したことのように言って相手の前に投げ出す」もので，動作動詞に限られるとしている。

しかし，事態が実現したかのようにいいなす，先取り要求としての命令であるとする従来の説，すなわち「完了のタ」説には若干疑問が生じる。もしも，これらの表現が「完了のタ」による命令であるとすれば，「完了」の意味を残したまま丁寧語に直してもなお命令として成り立つはずであるが，以下の例にみるように，いずれも不適切な文になってしまう。

（27）*どきました。
（28）*買いました。

一方，湯澤［1954］によれば，このような命令表現は，江戸時代にも存在していたという（以下の例（29）～（35）は，すべて湯澤［1954］からの引用である）。

（29）サアサア帰った帰った。（風呂，前下）
（30）サアサア着替えた着替えた。（八笑人，初一）

（29）～（30）のような「た」形による命令の場合だけでなく，例（31）～（35）のように「たり」形による例も見られ，「タ」の場合同様，命令の意味を表すとされる。

（31）こりゃ，待ったり待ったり，ころぶよ（風呂，前上）
（32）もっとうめたりうめたり，ぬるくなったら又湯をうめる分の重さ（風呂，三下）
（33）そりゃそりゃ，ばばっちいだばばっちいだ。飛んだり，きたなや（風呂，前上）
（34）それたばこ，もうちょっと手をのばしたり（八笑人，二下，一ウ）
（35）さあ［盃を］受けたからには飲んだり飲んだり（いろは，七一）

要するに，江戸時代には，例（31）～（35）にみるように，「タリ」による命令と「タ」による命令が併用されていたことがわかる。「タ」の古語形である「タリ」形による命令表現の存在からして，↗

6）（過去の）期待の実現を表わす

ここで寺村は，1)～3）は何らかの‘過去’に関係する referent を持っているのに対して，4)～5）は三上［1953］の言う「心的完了」に近く，6）は‘期待を持ったのが過去’であるという説明と共に，完結性や断定性が強く，陳述度が高いほど「ル」より「タ」がふさわしいと主張している。

以上のように，先行研究においては，タ形式の類似の現象に対して一見異なった記述がなされ，統一的かつ明示的な説明は与えられなかった。さらにそこでは，話者の「心的状態」あるいは「心象」という認知レベルのものを記述レベルにまで落とし込むことができなかった。

III. 「タ」のメンタル・スペース的解釈

1. メンタル・スペース理論の概観

メンタル・スペース理論では，言語表現でも現実世界でもないレベル C の構造を仮定する。Fauconnier（フォコニエ）［1990］は，言語表現をレベル E，現実世界をレベル R とした上で，新たに設けられた構造をレベル C としている（図 1）。そして，言語形式は，レベル C の構築を行うための不完全な指令であると考える。このレベル C とは，一種の心的表示（mental representation）と見なされる。言語を心的表示を構築するための“プログラム”と考えるこうした意味論は手続き的意味論と呼ばれる。あるいは，片桐［1988］の分類によれば，「認知的意味論」ということになる。フォコニエは，現実世界（レベル R）とレベル C との考証については何も触れていないが，メンタル・スペースの立場では，知覚や知覚に基づく推論によって知られる限りで現実世界は評価されるのであり，そのようにして知られた時点でそ

例（22）～（24）のようなものは，「完了形式のタ」の現れではなく「名詞相当句のタリ」の名残であるという可能性を否定できない。そこで，一つの解釈として，以下のような推論が成り立つのではないだろうか。つまり，（36）の「どいた，どいた」は（37）の「どいたり，どいたり」から由来しており，その「どいたり，どいたり」は名詞としての（38）「退場」と同格であると解釈することができるのである。

（36） どいた，どいた！

（37） どいたり，どいたり。

（38） 退場！

以上のように，命令に使われている「タ」が従来の説明どおり「完了のタ」であるのか，それとも「名詞相当句」としての「タリ」の名残であるのかについての結論は，現段階では保留せざるをえない。また，これらは繰り返し発話されることが多いが，その繰り返しは単なる強調であり，繰り返されることに特別な意味があるとは思われない。

（39） 退場！退場！

こうした観点からすると，この種の表現は直接本研究の対象にはならない。そこで，以下の議論においては，「どいた，どいた」に代表されるいわゆる先取り要求又は命令の「タ」については特に言及しないことにする。

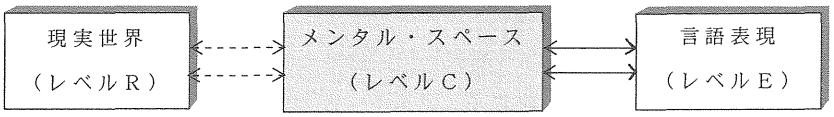


図1　現実世界とメンタル・スペース

れは心的表示となる（金水［1990］）。

ここでいうスペース概念の単純な例としては，絵の世界や映画の世界，物語の世界，想像世界などが挙げられる。さらに，条件節や仮定，信念，報告，推論，判断等も一種のスペースとして見なされる。たとえば，

(6)　絵の中では，この少女は緑の目をしている。

といった場合，現実スペース[2]とは異なる「絵の中」というスペースが構築され，「この少女」は「この少女の絵の中の対応物」を言及するために使われている。

(7)　私がレーガンなら，もっと私の給料を上げるだろう。

の場合も，現実スペースとは異なる，「私」が「レーガン」である反事実スペースが設定されており，現実の「私」から反事実スペースの「レーガン」への写像が行われる。

(8)　John wants to buy a panda.

においては，話者信念に対応する現実スペースとジョンの望みに対応する「ジョンの望みスペース」が設定されている。

(9)　In 1929, the president was a baby.

においては，「1929年」という時間スペースが構築されている。

このレベル C の心的スペースは，発話時の現実世界とは独立の心的構築物であるため，当然のことながら発話時とは異なる時間観念や信念，判断，推測等が可能となる。それは「我」によって認識されるスペースであり，そこでは時間観念も「我」によって設定され，評価時における「我の認識」をそのスペースに書き込むことができる。

一般にいう「過去」「現在」「未来」というテンス概念は，発話時に導入された我の認識スペースであろう。すなわち，過去の出来事を述べ，記憶し，回想する「過去」の空間，同時現在の他空間（たとえば，電話先の相手空間や絵の空間等），未来の事態推測による空間，仮定や想像空間，これらすべてが発話時における現実世界とは異なる心的スペースと見なされる。これらを現実の発話時に語るときは，対応関係を持つ複数の領域が相互連結し影響しあうことになる。

以上のようなメンタル・スペース概念を導入することで，「過去」「現在」「未来」といっ

2)　この現実スペースは，現実世界そのものであるレベル R とは別に，レベル C に構築される心的スペースの一つである。

た事態と時間の前後関係を述べているテンス，動作・作用のありようを述べているアスペクト，話者の主観的判断を述べているムードの「タ」を，レベル C の心的スペースにおける「我の視点」あるいは「我の完了認識」という立場から「心的表示のタ」として統一的に捉えることができる。

2. 過去・完了「タ」のメンタル・スペース的解釈

このように，メンタル・スペース概念を用いることによって，過去・完了の「タ」や多様なムードの「タ」さえも，話者の「完了認識」における心的表示の表出として解釈することができる。以下では，「タ」を話者の「完了認識」として統一的に説明する際に，「完了認識」を書き込めるスペースとしてのレベル C の構築について考察する。

では，「タ」の発話と関連して構築されるレベル C のスペースは，発話時における現実世界のレベル R とはどういう関係にあるのだろうか。

まず，時間の流れという観点から「タ」の発話と関連するスペース構築を見てみよう。レベル R の現実世界における時間の流れとレベル C の心的スペースにおける時間の流れは，発話時を基準に成り立っている。つまり，過去の現実の事態を発話時において語るためには，過去の現実に対応する過去スペースをレベル C に設定しなければならない。この過去スペースは，現在の現実に対応する現在スペースとも区別される。我々は現実の時間の流れの中を行き来することはできないが，レベル C における現在スペース，過去スペースの間ではそれが可能になる。

このように，レベル C は現実 R とは独立している。そのため，スペースにおける時間の設定やその流れも現実の R とは独立していると言えよう。そして，すでに終わった過去事態に対して，レベル C の完了認識が発話に表示されたのが，一般に言う回想の「タ」である。これを図示してみると以下のようになる。

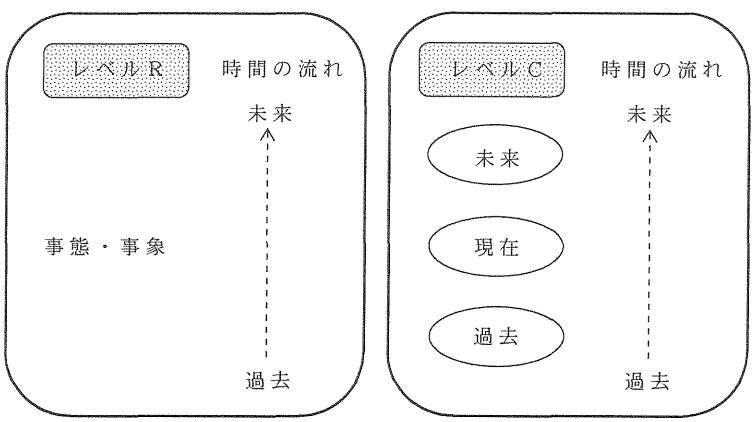


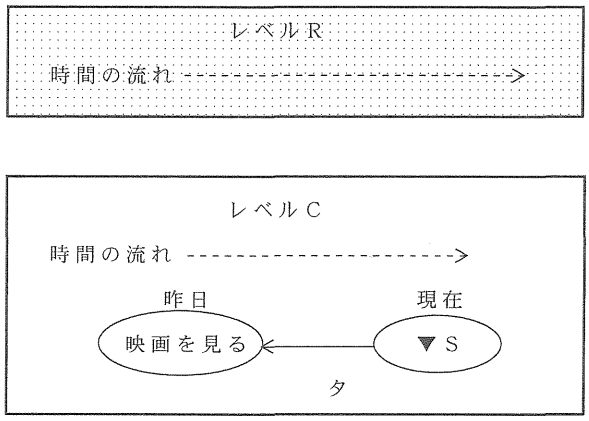
図 2　現実の時間の流れとレベル C のスペース

言語表現によるレベルCへの指令が成り立つには，少なくとも二つのスペースが要求される。その際，後続スペースに視点を置きつつ，先行スペースの事態を把握することによって「タ」の発話は可能となる。このように捉えると，従来，テンス・アスペクト的に「過去・完了」とされてきたものは，過去の先行スペースにおいて存在あるいは実現した事態を，現在の後続スペースに視点をおいて把握したものと理解される。このとき，視点と発話時点はともに現在の後続スペースに存在する場合が一般的「過去・完了」のスペース的解釈である。

以下の例を見てみよう。

(10)　昨日，映画を見た。

というとき，使われている時制は，すでに終わったことに対する「タ」であり，これは，現実世界の時間の流れに沿っている。さらに，これは，話者の心的空間であるレベルCの時間の流れにおいても，すでに終わったと確認している事態に対する「タ」である。図3に見るように，現在の後続スペースに視点を置きつつ，昨日の先行スペースを語っている。このように，レベルCにおける時間の流れと，レベルRの現実世界における時間の流れが互いに並行しているため，レベルRとレベルCが区別できず，両者は同一のもののようにテンス・レベルでは語られる。そのため，すでに終わったことに対する「タ」においては，テンス・レベルでも何ら問題はない。



注）▼：視点、S：発話時（以下同じ）

図3　すでに終わっている事態（昨日，映画を見た）

しかしながら，

(11)　明日伺ったらばお目に掛かれませうか。

の場合は，‘明日’という不確実な未来時がレベルCに導入され，レベルCの時間の流れの中で，「伺う」動作に対する完了認識が語られている。この場合の「タ」形の発話は，図4に見るように，視点が明日2の後続スペースに置かれ，先行スペースの明日1を振り向くこ

とによって生じている。

このように，現実世界の時間の流れとレベル C の時間の流れが，必ずしも一致するとは限らない。レベル C の心的スペースにおける時間の流れは，現実世界の時間の流れとは別に，独立して設定されているといえる。

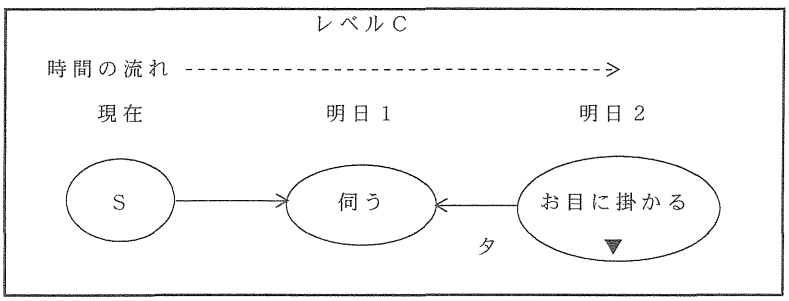


図4　明日伺ったらばお目に掛かれませうか

また，

(12)　もうあの本は読んだ。

における「タ」も，現実世界 R の時間の流れを語っているとは言えないものである。これは，「本を読む」ことが存在し，それが限界達成に至っていることを表す過去のスペースを，後続スペースである現在の視点から振り向くことによって生じるものである。すなわち，話者の「完了認識」の心的表示として「タ」が用いられていると考えられる。

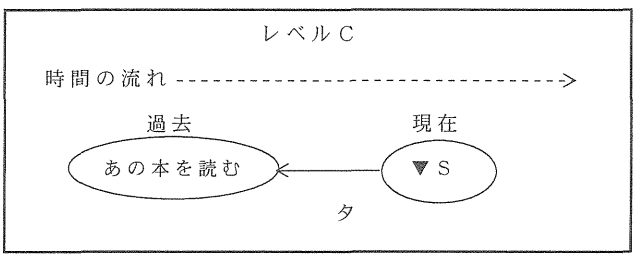


図5　もうあの本は読んだ

(13)　コノ椅子ハ先刻カラココニアッタ。

さらに，この「タ」はいかにも現実世界の時間の現れのように見えるが，知覚として表出するものではなく，経験として報告するものである。ここでは，「経験」という独立したレベル C での時間設定が設けられており，レベル C における「完了状態である」との話者認識の表示として「タ」が用いられていると考えられる。ちなみに，この (13) の「タ」について，三上［1953］は「心的完了説」を提唱している。

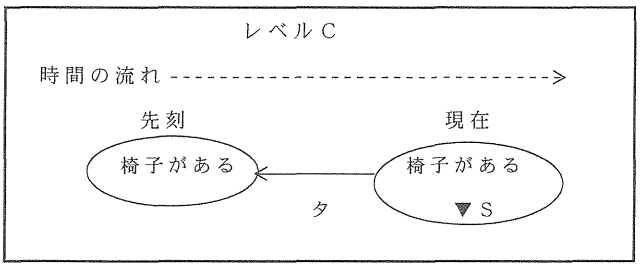


図6　コノ椅子ハ先刻カラココニアッタ

本稿では，これらの発話における「タ」は，話者の心的レベルを語っているもので，時制の「タ」ではなく，話者の心的表示の「タ」であると解釈している。このように考えると，テンス説を唱える鈴木（英）［1970］の‘認定’という概念は，レベルCにおける「話者認識」として再解釈できよう。

さらに，松下［1930］の，「判断主体たる『我』をどこに置いて考えるかという，完了を認定する我」の概念は，心的スペースへの「話者の視点移動」と，そのスペースにおける「話者の完了認識」として再解釈できよう。三上［1953］の「心的完了説」についても，レベルCで行われる「話者の完了認識」として再解釈を与えることができよう。

このように，現実世界Rとレベル C の心的世界を分離して考えることによって，「タ」と関連して，「話者の完了認識」という統一的な視点が提供されうる。こうした観点からすれば，松下［1930］の，「タは現在，過去，未来，不拘時の何れにも用いられて完了を表す」という観察は概ね正しいものであると考えられる。また，山田［1908］の「時間を超越した断定」「吾人の主観と時間経過との関係により生じたるもの」「回想作用」「予期設想」などについても，その背後にはレベル C の認識が暗黙的に前提になっているように思われる。

3.　ムード「タ」のスペース構築

過去・完了については，時間の流れに注目することで，レベル R の現実世界とは別にレベル C の心的スペースが独立して存在していることをみた。

テンス・レベルにおいては，レベル C での時間の流れが，R の現実世界における時間の流れに沿っているため，レベル R とレベル C が区別できず，両者が同一のもののように語られることを指摘した。ここでは，いわゆるムードの「タ」とされるものをレベル C の構築によって説明してみよう。

（14）　君は確かブラックで飲むんでしたね。

この種の文では，相手の嗜好に関する情報を得た時点が焦点化され，発話時において，改めて相手の嗜好を聞く現在スペースとは異なる，過去のある時点 R に同定するレベル C の

スペースが設定されている。この「タ」は，以前に一度情報を得たということを前提にしており，レベル C では，情報の書き込みが完了しているという「確認」のもとで表出されるものであり，「話者の完了認識」を表す心的表示である。金水［1997］では，この種の文に，スペースにおける「事後的評価」という説明を与えている。

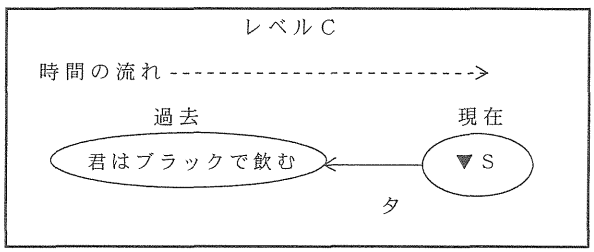


図7　君は確かブラックで飲むんでしたね

(15)　（クイズ番組の司会者）正解は，3番でした。

この場合も，クイズ問題を作成した時に正解を3番にしていることが前提になる。隠された正解をあかす発話時の現在スペースからクイズの正解が隠されている過去スペースを振り向き，その正解が3番であることを確認する「完了認識」が表出されたのである。

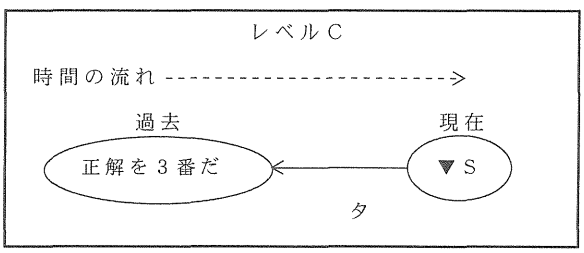


図8　正解は，3番でした

(16)　（学校を出て，帰りかけて，傘を忘れたことに気づいてひきかえす。教室のすみを見ると，期待どおりに傘がおいてある。）

あ，あった。

この場合，傘を発見する現在スペースにおいては，「傘がそこにある」という知覚の認識としての表出になるが，それとは別に，すでに「傘を忘れたことに気づく」時点において，「傘を見つけよう」とする過去スペースが設けられている。傘を見つけようとしている間のレベル C の時間の流れは，現実 R の時間の流れに沿っている。傘を発見する時点の現在スペースから振り向くと，「傘を見つけよう」として設けられた過去スペースが完了することになる。「タ」はその完了認識による心的表示である。

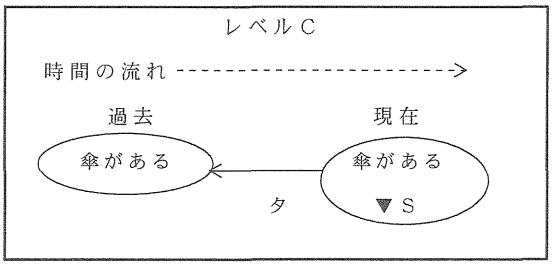


図9　あ，あった

この場合，「傘を見つけよう」とするレベルCの話者認識過程を反映して，

(17)　a *やっと，傘を見つける。

　　b　やっと，傘を見つけた。

のように，「ル」形は許容されず，話者の「完了認識」を表す心的表示の「タ」形のみが許容される。

このようなことは，未実現の事態に対しても言える。たとえば，ある未実現事態が存在し，その事態が限界達成に向けて進行する際に，話者は現実世界の状況や情報をもとに，レベルCの心的スペースを構築する。レベルCにおいては，いくつかのシナリオが存在する。レベルCの時間の流れはレベルRの時間の流れとは独立しているため，話者は時間の流れをスキャニングできる。

現実Rレベルからの情報の変化を動的に取り入れながら，レベルCにおけるシナリオの候補数は収斂される。さらに話者はそのシナリオが限界達成に至る時点までも辿ることができる。その限界達成後のスペースに話者視点を移すことで「完了」を認識する。そして，レベルCでの「完了認識」が発話に表示されたのが未実現事態に用いられる「タ」形である。こうしたレベルCにおけるスペース的解釈によって，いかなる心的スペースにおいても，話者は時間的制限を克服した発話を導くことができる。レベルCにおいて話者視点を移動し，完了を認識さえすれば，「タ」形の発話が成立するのである。

レベルCにおける発話時点と話者視点が後続の同一スペースに存在しているのが「過去・完了」の「タ」であり，現在の先行スペースに存在している事態について，その事態の完了する未来の後続スペースに視点を置きつつも現在の先行スペースに話者の発話時が置かれている場合が，未実現事態の「タ」である。

以下では，未実現事態に用いられる「タ」との関連で，レベルCのスペース構築を見てみよう。

(18)　これは，勝ったぞ。

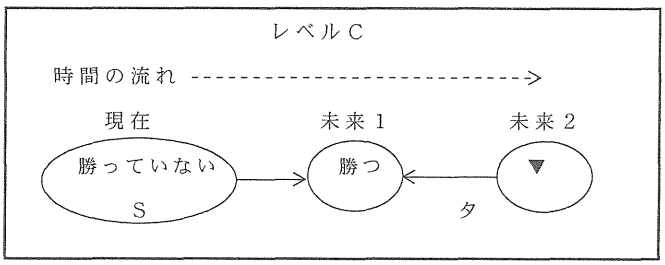


図10　これは，勝った

この場合，発話時の現実世界Rにおける試合の情報をもとに，レベルCの心的スペースが構築される。その際，現実世界Rの状況のうちの関連要素が「これは」を通して，レベルCに設定されるとともに，試合の流れに対する話者の確信までもレベルCに書き込まれる。そして，限界達成後のスペースに視点を置きつつ，事態を振り向くことにより完了を認識し，それが「タ」によって表示される。もっとも，これから実現しうる事態，すなわち未実現事態に対して，レベルCにおいて話者が完了を認識し，それが「タ」として表示されるためには，いくつかの条件が必要となる。

一つは，現実世界Rレベルでの状況が完結に近づくにつれ，レベルCでのシナリオの候補数が一つに収斂する場合である。いま一つは，「よし，決めた」のように現実の行為以前に話者の決意表明を行うことができる場合である。もっとも，漢語動詞より和語動詞のほうが，または述語の語彙的性質として完結の意味を内在しているもののほうが「完了認識」の表示によりなじみやすい。

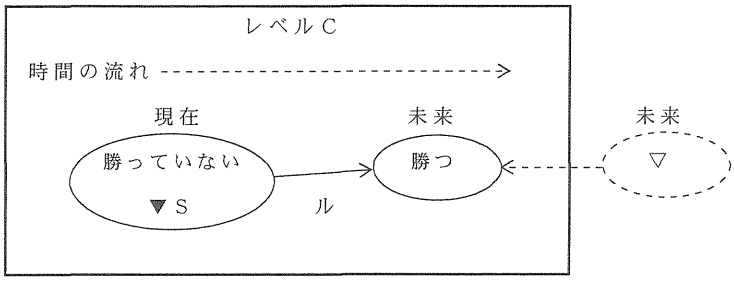
未実現事態に関する従来の記述においては，事態の完了が確認できれば以下のaのル形とbのタ形がともに成立するといわれている。

(19)　a　これは，勝つ。

　　b　これは，勝った。

しかし，図1に示したように，言語表現（E）は心的スペース（C）への指令であり，現実世界（R）とは独立している。すなわち，タ形はRとは独立である。さらに，現実世界Rの時間の流れとレベルCの時間の流れは独立しているため，現実世界の時間の経過が直接「タ」の使用を決定づけることはない。つまり，bの「タ」はレベルCでの心的表示なのである。

要するに，このル形とタ形の相違については，図10と図11の比較からわかるように，発話時の現実世界で得られた情報とその情報を元にする確言や確信をレベルCの新たなスペースに書き込む場合，話者の視点がどこにあるのか，つまりレベルCに事態の限界達成後のスペースまでを含んでいるか否か，限界達成に対する話者の完了認識が働くか否かによって，aと



注）▼：「ル」が用いられる場合の視点の位置
　　▽：「タ」が用いられる場合の視点の位置

図11　これは，勝つ

bの「ル」形と「タ」形のニュアンスの違いがもたらされるといえよう。

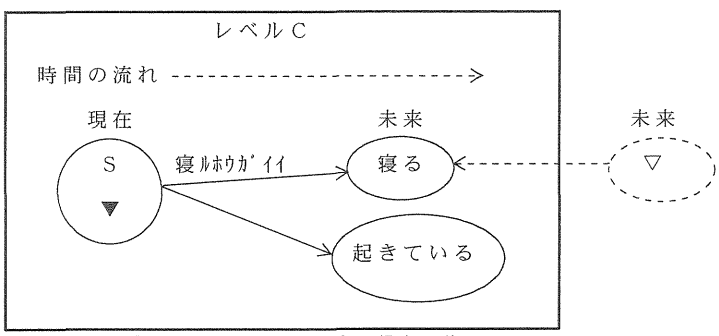
(20)　早く寝たほうがいい。

この例では，「ほうがいい」という言語表現によって非現実のスペースが構築されている。構築されたレベルCにおいて，話者は「早く寝る」という仮想事態の完了を描いている。したがって，話者の仮想事態に対する「完了認識」としての心的表示「タ」が発話に導かれるのである。これは次のように書き直してみれば理解しやすい。

(21)　a　音楽を聴くのもいいけれど，やっぱり寝るほうがいい。

　　b　音楽を聴くのもいいけれど，やっぱり寝たほうがいい。

上記二つの例からは，「ほうがいい」が構築するスペースの中で，「寝る」という一般の選択事態を語っているのか，それとも「寝るという行為が行われ，その結果としてもたらされるもの」としての評価を話者の「完了認識」として語っているのかの違いを読み取ることができる。前者の場合，話者視点は発話時と同じ先行スペースに置かれ（図12），他の選択余地も考慮されるのに対し，後者の場合には，話者視点が発話時とは別の限界達成を振り向く



注）▼：「ル」が用いられる場合の視点の位置
　　▽：「タ」が用いられる場合の視点の位置

図12　寝るほうがいい

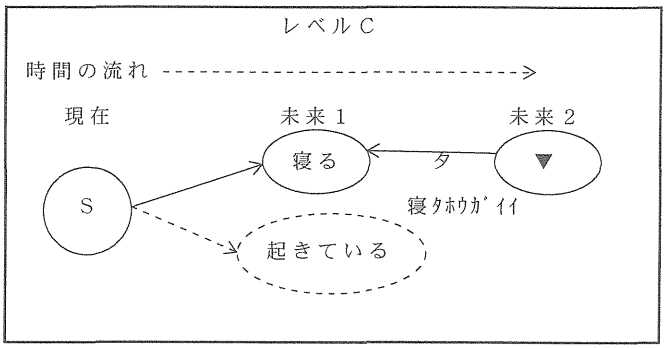


図13　寝たほうがいい

後続スペースに置かれ（図13），他の可能性が排除されることになる。これは，レベルCに限界達成後のスペースを含んでいるか否かによる違いでもある。すなわち，「タ」の表示は，話者の「完了認識」が表出されるか否かに関連しており，心的表示の「タ」といえるのである。

4.　ムード「タ」のメンタル・スペース的解釈

「タ」研究のレビューにおける，山田［1908］の「時間を超越した断定」「吾人の主観と時間経過との関係により生じたるもの」「回想」「予期設想」や三上［1953］の「心的完了」説，寺村［1971］の「複雑な話し手の心的状態の反映」などはメンタル・スペース概念に非常に近いものであると考えられる。ここでは，先行文献の中から，メンタル・スペースあるいはそれに類似した装置を用いてさらに積極的に「タ」の解釈を行っている研究を取り上げてみよう。

高木［1993］は，「タ」の現象を，認識と発話の過程を考慮に入れ統一的に説明しようとしており，タが「事態の推移を表すマーカー」として機能する場合と「事態の存在を表すマーカー」として機能する場合とを区別して説明を与えている。すなわち，「話者が事態の存在や推移を認識する」ことによって，記憶システム内の情報が記号化され言語表現として成り立つと見るのである。

また金水［1997］は，ムードの「タ」の解釈において，寺村［1984］の「叙想的テンス」と照らしあわせながら，寺村のいう「心理的」あるいは「心象」の意味について談話管理理論をもとに明示的な解釈を与えている。この談話管理理論は，発話を心的データベースへの操作指令として捉えるもので，メンタル・スペース理論の一種である。

金水［1997］では，「期待の実現」「発見」「忘れていたことの想起」「事後的評価」などと関連するものにおいて，発話時Sに知られた状態pが，過去のある時点Rから成立してい

ることを述べるために，新たにRにpを登録した場合，ムードの「タ」の意味が生じるとしている。さらにこれらは，発話時や過去時を示した「視点」が，動的出来事を収める「時間帯」ではなく，静的な状態の集合として捉えられる状態性述語であると指摘している。そこでは，「過去事実」と関連する「タ」について，メンタル・スペースの導入が明示的に示されている。

本稿では，金水［1997］のいう「過去のある時点Rから成立し，発話時に知られている状態を，新たにRに直接登録する」ことについて，実際の時間の流れからして，現実の過去の空間（金水では，過去のある時点R）にその状態を書き込むのは不可能であり，したがって，「過去のある時点R」と同定しているレベルCのスペースを設定し（金水では，新たなR），そのスペースに状態（金水では，状態p）を登録するものとして解釈している。換言すれば，これは，発話時におけるレベルCの心的スペースの構築について論じたものであり，心的スペースを明示化したことは注目に値する。

発話の評価時に得られた情報を新たな空間へ書き込む際のこうした原理は，「未実現事態」に対しても適用できる。つまり，発話時までに得られた情報から未実現事態に対する評価を下し，それをレベルCの新たな空間に書き込み，話者が完了を認識するとき，「未実現事態」に「タ」が表示されるであろう。

IV. むすび

本稿では，過去・完了形式としての「タ」形式について，メンタル・スペース的な解釈を試みた。「話者の心理状態の反映」というものを明示的に捉えることのできるメンタル・スペース理論と関連づけて説明することで，過去・完了の「タ」と「多様な意味のタ」など，「タ」に関する諸現象はスペースにおける「話者の認識マーカー」として捉えられた。このことは，これまでに類似した「タ」の現象に対して異なった説明がなされてきたものを，「スペース内での話者認識」として，全体的，明示的に，かつ統一的に説明できることを意味する。その際，「タ」はテンス・アスペクト・マーカーとしてではなく，心的現象を普遍的に説明する「話者認識マーカー」として解釈されることになる。

【参考文献】

尾上圭介（1982）「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』第1巻2号
片桐恭弘（1988）「談話の世界」『自然言語理解』オーム社
片桐恭弘（1992）「状況意味論と談話理解」『人工知能学会誌』vol. 7, No. 3
金水敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『談話・意味・語用論』昭和62年度科学研究費特定研究成果報告書

金水敏（1990）「メンタルスペース理論を中心に」K.L.S. Vol. 10
金水敏（1993）「古事記のテンス・アスペクト」『国文学解釈と鑑賞』58巻7号
金水敏（1994）「連体修飾節の『－タ』について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
金水敏（1997）「いわゆる‘ムードの「タ」’について――状態性との関連から――」東京大学国語研究室創設百年記念　国語研究論集』汲古書院
金田一春彦（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト――現代日本語の時間表現――』ひつじ書房
B. コムリー著，山田小枝訳（1988）『アスペクト』むぎ書房
Comrie, Bernard（1976）*Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press.
小矢野哲夫（1982）「国語学におけるテンス・アスペクト観の変遷」『日本語学』第1巻2集
坂原茂（1989）「メンタル・スペース理論概説」『日本語のモダリティ』くろしお出版
曺　美庚（1995）「日本語の「タ」と韓国語の「ess」の対照研究――心理的完了における語用論的側面を中心に――」神戸大学大学院修士論文
曺　美庚（1997）「想定空間の同一化と完了形発話」『研究ノート』Vol. 32，神戸大学
曺　美庚（1997）「未実現事態の心的パーフェクト」『Kansai Linguistic Society』Vol. 17
鈴木重幸（1976）「日本語の動詞のとき（テンス）とすがた（アスペクト）――～シタと～シテイタ――」金田一［1976］に収録
鈴木英夫（1970）「過去と完了――「－た」と「－てしまう」を中心として――」『文法』第3巻第2号
高木一広（1993）「認識と発話の過程を考慮した意味記述の試み――日本語の文末表現「た」を例に――」神戸外国語大学大学院修士論文
高橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所秀英出版
田窪行則（1992）「メンタルスペース理論」『言語』Vol. 21, No. 12
J. ディンズモア著，坂原茂訳（1990）「表現と言語理解理論としてのメンタルスペース理論」『認知科学の発展3』認知科学会
寺村秀夫（1971）「‘タ’の意味と機能――アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」『岩倉具実教授退職記念論文集　言語学と日本語問題』くろしお出版
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅱ――日本語文法編――』くろしお出版
Fauconnier, Gilles（1985, 1994）*Mental Spaces.* MIT Press, Cambridge. 坂原・水光・田窪・三藤訳（1996）『メンタル・スペース』白水社
Fauconnier, Gilles（1990）*Domains and Connection.* 坂原訳（1990）「領域と結合」『認知科学の発展』vol. 3　講談社
松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店．復刊（増補校訂）勉誠社（1977）
三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院．復刊くろしお出版（1972）